

# 日系アメリカ人5世の民族誌

— コナコーヒーベルト地域における日系社会の事例研究 —

Ethnographic Studies on the Japanese American Fifth Generation:  
A case study in the Kona Coffee Belt Japanese Community

重 藤 智 美

Tomomi SHIGEFUJI

キーワード：日系アメリカ人5世、日系コミュニティー、世代変容、エスニックアイデンティティー、  
宗教的アイデンティティー

Key words: Japanese American Fifth Generation, Japanese community, Generational  
transformation, Ethnic identity, Religious identity

## はじめに

脱伝統化と同化の影響により日系人のエスニックアイデンティティーの維持が困難になっているのではないかという疑念について、その影響の程度が報告されている。

日系アメリカ人のエスニックアイデンティティーについて記述したこれまでの研究の中に、婚姻形式の問題に触れているものはほとんどない。そのため、本稿では、5世代にわたって米国に在住している日系アメリカ人がなお日系人同士で結婚を求めている事象について検討する。この問題を検討するにあたり、次の事を念頭に置いておきたい。1960年代後半までの米国では、地域によって婚姻の規制が行われていた。その規制では、アフリカ系アメリカ人およびアジア系アメリカ人らが、他の民族との結婚について非合法であったということである<sup>1</sup>。本研究では、ハワイ島のコナコーヒーベルト地域に存在する日系人コミュニティーに注目する。さらに、そのコミュニティーに属する日系5世に焦点をあてる。彼らの婚姻についての現象をさらに分析するため、次の理論的枠組みを設定した。世代変容理論、エスニックアイデンティティー理論、宗教的アイデンティティー理論の3つである。

## 1 調査方法

ここでは、調査方法と調査対象者について述べていく。まず、現地出身者でない筆者が調査を行うにあたり、注意した点は次である。情報を得るために使用する質問が、筆者と調査対象者との間に人種的な緊張感を生む可能性が否定できない。従って、特別な配慮とタイミングについて慎重に検討した。特にインタビューを行う際、筆者の質問が、他の質問の回答を損なってしまう

ことを危惧した。その為、対象グループの面接の際には、そのような話題を話すことに問題がない調査対象者を選択した。

居住している地域によって、同じ民族同士の結婚に対する反応には大きな違いがある。コナコーヒーベルト地域の5世の間では、日系人同士の結婚を依然として好む傾向がある。まず、初めに次の調査を行った。日系人同士の結婚について、25人、個人的に面接を行った。その回答は、23人が民族内での婚姻に積極的であると回答し、1人がアジア系アメリカ人との婚姻を容認できるとし、残りの1人はこの問題に関心を示さなかった。

さらに、調査を行っている滞在期間、およそ30人の大学生が再会するパーティーが行われた。調査対象者の半分は日系人、残りの半分は複数の民族的背景を持ち合わせていた。このパーティーは、筆者の儀母が所有する自宅の隣で行われた。開催者は、筆者の甥である。集まった大学生の多くはホノルルおよび米国本土で学ぶ学生で、夏期休暇中に帰郷していた<sup>2</sup>。ビールなどのアルコール飲料が大量に飲まれ、パーティーが賑やかに盛り上がりを見せ始める中で、筆者は、5人の大学生を対象としてフォーカスグループのセッションを実施することとした。議論は、エスニックアイデンティティを話題とし、さらに、デートや婚姻形態の話題に移った。フォーカスグループのセッションに集った対象者が、幼少時代からの親しい友人の間で実施されたこと。そして、いくらかアルコールの影響下にあったことが複合的に作用し、調査対象者らが本当の心情を開くことに抵抗感のない環境が生まれた<sup>3</sup>。結果的に、このフォーカスグループセッションでは、感情のこもった真の心情の表現を調査対象者から得ることが可能となった。

調査対象者となった5人の若い日系アメリカ人は3人が男性で2人が女性であり、全員が20歳代の前半で、日系アメリカ人コミュニティーの中心となるコナコーヒーの生産地帯の中心部で育った。調査対象者は、日本仏教を宗教としているが、民族的・宗教的活動に強くかかわるべきという考えを特に持たない人々である。5世である彼ら個人については、日本文化の伝統の影響は弱く、アメリカの中心的社会に同化していると思なされがちである<sup>4</sup>。しかし、若い個人である彼らは、日系人としての誇り高い自意識を持っている。その背景には、コナ地域におけるコーヒー農業に携わりハワイの日系大乘仏教会とのつながりを持ち、日系アメリカ人社会の子供として成長したことによる日系人としての社会化がある。これらの個人がかかわる仏教寺院は同一ではないが、寺が行う類似した活動を基礎的体験として共有している。また、これらの個人は、「日本人であることの良さ、文化的伝統、文化の価値」と見なすものに対して、一定の愛着を有している。このことが、これらの個人に良き日本人としての生活スタイルを固持させている。

## 2 日系アメリカ人5世の事例

### 2.1 家族の影響

自分が属する民族集団内での婚姻に積極性を示した5人の調査対象者の内、3人が3世の祖父

母と同居していたと回答している。そのうちの2人は、もし日系人以外の人とデートしようとするれば両親から強い抵抗を受けるだろうという懸念を示した。その他の3人の調査対象者も、自分たちの場合も家族内で居心地の悪い状況が生じるだろうと同意した。5人の調査対象者は、最も大きな抵抗は間違いなく祖父母からのものになるだろうと語った。ある調査対象者の発言を紹介する。

ジェームズ<sup>5</sup> フォーカスグループセッション 参加者

僕のいとこが5年間女の子とデートしていて、その子はフィリピン人なんです。母親も父親も兄弟も、家族全員がとても仲良くしてきました。でも、この5年の間、頭の片隅で、いとこが感じてきたことがあって、それはつまり、この関係を思い切って終わらせなければならないという気持ちです。祖父母のためです。祖父母がこのことを知ったら、それで終わりでしょう。祖母の目から見れば、日本人以外の誰かと結婚するなどということは、神に誓ってあり得ないことなのです。この関係が続く中で、この2年ほどの間、私たちの家族は、この話を祖父母に知らせるための方法がないか探しています。

ここで筆者は話に割り込み、「選択の時代である今、お祖父さん、お祖母さんの考えをどうして気にするのですか」と、質問した。

ジョン<sup>6</sup> フォーカスグループセッション 参加者

祖父母の願いは尊重したいと思います・・・少なくとも祖父母の意見を尊重しなければ・・・日本人と結婚することを最初から言われてきましたし・・・祖母のところを訪れるたびに言われてきたのです。「誰々（この人）がこのハッリー（白人）の女の子と結婚して、ほらやっぱり離婚したよ<sup>7</sup>」みたいな話。こんなことをいつも聞いているので、とうとう、僕自身もこのバカな話（ナンセンス）を信じ始めているくらい。祖母が血のつながりを気にしているというようには思えないんだ。むしろ、差別のような外からの力や、もっと言えば何らかの文化的違いのことを心配しているように思うよ。

ジェームズ フォーカスグループセッション 参加者

本当に、私の祖母もまったく同じことを言っています。でも、私の祖父は反対のことを言います。「愛する人と結婚して本土に行ってしまうなさい」ということを言っています。

結果的には、祖母が思いがけない心臓発作で死亡し、1年後に結婚をすることでこの話は終わった。5世のジェーン<sup>8</sup>も似た経験を持ち、曾祖父母から異民族との結婚は認められないと言われている。驚くべきことではないが、彼女の曾祖父は、非常に描写的な言葉遣いで極めて直接的な

話し方をする人で、政治的に正しい話し方をする祖父母や父母とは違いがある。世代における変容理論から検討すると、祖父母から孫にかかわるこの特定の事例においては、デートと婚姻の形態に関する意思決定にある程度の影響が見られた。異族婚から生じる軋みについて頻繁に言及し、恐怖感を作り出すことで、一部の事例では、これらの個人に対して自分の民族集団内で結婚するよう説得することに成功している。発言をさらに分析すると、これらの調査対象者が父母と祖父母を尊重する気持ちも明らかになった。これは、以前からある日本民族の文化の一端である。年長者に敬意を払う慣習と義理人情、すなわち自然やその回りのものと共感する能力は、日本文化であり、過去の世代から受け継がれている。

同族婚は、世代変容理論において、デートや婚姻の形態の現象の一部にすぎないという意味で、錯綜した問題である。それ故、次にコミュニティの役割について検討したい。

## 2.2 コミュニティーの影響

コナコーヒーベルト地域における日系コミュニティでは、異族間の結婚について語ることで、日本人としてのアイデンティティを維持していることを示している。参加者の語りから、もし日系人の彼らが非日系人と交際している場合、コミュニティの否定的な対応に気づくであろう。

### サム<sup>9</sup> フォーカスグループセッション 参加者

えーと、非日系人と結婚しないのは、他人から差別（異民族差別）の圧力に耐えきれないからだと思う。僕に、コリアンアメリカンの男性と結婚したいとこがいて、詳しくは分からないけど、複雑みたい・・・家族全体がいとこに対して怒っているみたい。僕が思うに、彼女が家族をそういう苦しい状態にさらしたっていうことは尊敬できないね。

彼女は、自己中心だよね・・・さらに痛々しいことに、日系のコミュニティからも受け入れられてないことだよ。他の親戚や友達は、いとこたちやいとこの家族の周辺にいと不安そうなんだ。なんで、自分と同じ人種<sup>10</sup>（日系人）の誰かと安全に結婚しなかったんだろう。結婚っていうだけで大変なのに、なんで他の人種（民族）を選ぶんだろう。

### ジョン フォーカスグループセッション 参加者

チェルシーっていう僕の元彼女は、僕と別れてから白人と付き合い始めたんだよね。まあ、彼女は悪の側に変ったのかな。なんで、彼女が白人たちと遊び始めたか分からないけど・・・。ちょっとかわいそうな気がするけど、噂が噂を生んで、彼女は疎外されている感じ<sup>11</sup>。僕の友達とか、彼女のいとこでさえ、ばかにしてる。みんな彼女の後ろで悪口を言って、だれも彼女のこと相手にしなくなってる。どうしようもないよ。

上記の語りから、次のことがわかる。日系コミュニティに属する家族や個人は、異族婚について、彼らの文化を脅かすものとしてみている。特に結婚は、日本文化を後世に伝えるべき遺産であり、コミュニティの基盤として統一することができる。コナ出身のグループセッション参加者は、非日系人に対し生存への強力な脅威となると考えている。さらに、異族婚した場合は、親密さを認識する同族への概念機能に影響する。そのような概念は、婚前に、同族の関係を崩壊させ、異族婚を助長させるかもしれない。その概念を維持する方法は、異族婚の率を防ぐか、異族婚への社会支援又は、異族婚の土台を切り離すしかない。しかし、「結婚っていうだけで大変なのに、なんで他の民族を選ぶんだろう。」という点について、以下のことが言える。もし、一地域民というよりも、家族や友人たち、コミュニティの人々からの支援や歓迎を受けようとするならば、異族婚は、実行不可能である。結婚は、家族や友人たちによって支配されている。加えて、彼らは、彼ら自身を取り巻くコミュニティと強い絆がある。それらの語りから、異族婚というリスクを冒すのではなく、彼ら個人が、真剣に同族婚を選択し、決断していることを示している。同時に、個々が同族婚を積極的に選ぶ傾向は、コミュニティ自体からの影響もあることが言える。

#### ジョン フォーカスグループセッション 参加者

僕は、このコミュニティの一部であることを誇りに思うし、日本人であることも誇りに思う。日本人（日系）の友達とぶらぶらしたり、友達の両親と両親の友達と何かする時は、居心地いいんだよね。みんな何かしら関係があったり、同じ文化や伝統を共有できるから。

僕がシアトルに行った時ラッキーだったのは、大学のハワイアンクラブで友達をすぐに作ったことかな。うん、友達みんなハワイ出身なんだ。今の彼女もホノルル出身の生粋の日本人（日系人）だし、・・・まあ、少なくとも彼女は日本人（日系）でハワイ出身でいうことかな・・・僕は大丈夫。なぜなら、僕の親父は何も言えないからね。でも、1つだけ言うなら、彼女がここ（コナ）の出身であったならね。これは、彼女に言わないで。

僕たちのコミュニティの中で、僕たちの両親や他の家族を見てみてよ。みんな幸せそうに暮らしてるよ。もちろん、完璧な夫婦なんていないだろうけど、僕たちのコミュニティの中全体としてみたら、多くの夫婦は結構いい線いってると思うよ。少なくとも僕が知っている1組はね。

#### スティーブ<sup>12</sup> インタビュー

自分自身では、半分日本人（日系）と言える。コナで育て、自分の家族半分はここに住んでる。僕の彼女は、生粋の日本人（日系人）で、現在2年ぐらい付き合ってる。だぶ

ん、いつか結婚するでしょう。僕の場合、ここのコミュニティーは、僕が半分日本人（日系）っていうことを知っているけど、大抵誰とでもうまくいっている感じかな。外見が白人よりも日本人（日系）っぽいし・・・。

ジュリー<sup>13</sup> フォーカスグループ 参加者

私は、ここ（コナ）を誇りに思います。このコミュニティーは、日本の伝統が受け継がれています。そして、多くの良いことを（コナのコミュニティーから）学んでいます。例えば、自分の家族や友人、日本人（日系人）としての人生です。さっき、ジョンが「彼女の出身がここだったらよかったのに。」って言ったように、私も誰か親切で優しいこの出身の日本人（日系人）と結婚したいです。

ホノルルに住んで思ったことは、早く大学を卒業してここへ戻ってきたいってこと。なぜなら、自分が育ったように、小さくて親密なコミュニティーに居るのが心地いいから。私たちには、日本人の文化や背景、そして（日本文化の）歴史に属している感覚があるんです。

前述したジョン、ジュリー、その他の多くは、コナという特定のコミュニティーに属する事例を示したものである。これらは、幼少時代を温かく幸せな経験を共有して過ごした場所に帰りたいたいという自然な現象といえる。18歳になったジョンとジュリーの2人は、実際に住み慣れた心地よいコナを離れ、他の地で、異なったコミュニティーや文化と接触するといった様々な経験をした。

ジュリーの事例では、大学を卒業し、コナに戻り、彼女の属する身近で親密なコミュニティーで誰かパートナーを探すことを切望していることがわかる。それに加えて、将来、彼女が家庭を持ち、子供ができた時に、日本文化を共有することを楽しみにしている。

ジョンの事例は、人生に完全な解決策はないと指摘している。ジュリーの語りと同様、コナの日系コミュニティーに属する彼らの両親や、他の日系の両親を例にあげ、同族婚に対しての感情を個々が共有していることがわかる。

サムの語りから、エスニックアイデンティティーについて言及することができるであろう。Tajfel (1978) の社会的アイデンティティー理論によると、個人の知識は、自分の属する社会集団（または複数の社会集団）から由来する。そして、その社会集団は、個人の価値や感情に深くかかわっている。その理論をサムの事例に照らし合わせてみると、社会的な集合集団である日系人コミュニティーによって同族婚が助長されていることがわかる。彼自身のエスニックアイデンティティーの感覚は、日系仏教徒の友人（友人のほぼ全体を構成しているのは、コナ本願寺浄土真宗、コナ大福寺曹洞宗の2つの寺どちらかに属する日系アメリカ人である。）と外部のコミュ

ニティーに属する人々との比較に基づいている。サム自身の属する本願寺浄土真宗は、日系の社会集団で、多文化、または様々な民族で構成されていない。筆者は、サムと同じ寺に帰依するハロルドが、次のように述べている機会に遭遇した。「日系仏教の寺として唯一、単一民族で構成された本願寺に、彼の何世代もの先祖が帰依したことに誇りを持っている。」と、ハロルドは語った。サムやハロルド、その他の語りから、彼ら自身で日系仏教徒として名乗り、同族婚の慣例があることを示している。

ジョンによると、アメリカ本土へ引っ越した後、彼は日系仏教徒である何人かの知人と連絡を取ったと言う。そして、連絡を取った人々と友情を築こうとした。しかし、本土で育った日系仏教徒の人々とは、残念ながら親しくなることはできなかった。「本土で育った日本人（日系アメリカ人）より、僕が育った場所の日本人（日系アメリカ人）の方が日本文化を理解しているって気づいたよ・・・本土（アメリカ本土）での経験から、どんな女の子でもいいっていうわけじゃなくて、ハワイ出身の日本人（日系人）がいいなって。だって、文化の違いがあるから。」と述べた。ジョンは、他の日系アメリカ人コミュニティでの経験を照らし合わせた。そして、彼は、他の日系アメリカ人とは異なった感覚の背景を持つことを発見した。その感覚とは、日系アメリカ人のアイデンティティーというよりむしろ、日本人または、ハワイ出身の日系人というアイデンティティーであると知覚した。

さらに、Tajfel (1978) のエスニックアイデンティティーを用いて明らかになったことは、ハワイ出身の日系アメリカ人グループの内側に隠された複雑な状況である。その状況とは、日系アメリカ人の人々のアイデンティティーを引き出し、集団に対するステレオタイプや特性に気づくことで、社会的比較や集団の拒絶を被った。しかし、状況の変化（例えば、大学に進学・海外に行く）により、幾人かの人々は、自分の属していたグループと他を比較することで、自身の概念を変化させている。

### 2.3 日本文化の価値観というコンテキストにおける宗教的アイデンティティー

日本文化の価値観や社会化のパターンを定義するのが、集団のアイデンティティーであったり、日系アメリカ人コミュニティの形であったりする。日系アメリカ人のコミュニティでは、伝統的に日系家族を1単位として扱う。その家族らは、所属するグループ内部に依存し、伝統的価値を永続させる。同族婚についての問題では、文化相違の問題<sup>14</sup>について幅広く議論されている。フォーカスグループで討論の際、筆者は、同族結婚についての論題を与えると同時に、次に議論する文化についても言及するよう指示した。そこで、リンジーとジョンが、異性と付き合うパターンにおける文化の慣習について語った。

リンジー<sup>15</sup> フォーカスグループ 参加者

文化は、全てだと思うんです。私は、社会学者でもなんでもないけど、お正月、お盆などの伝統的な休日や、宗教的には、お墓参りっていうことを重要視していて・・・何が自分に一番大切かって言うと、日本文化の価値観。日本語で何て言うか分からないけど、差し控える（遠慮）、物事に対する道理や思いやり（義理人情）、年上の人や他人を敬うなど・・・もちろん、日本食も文化よね。ねえ、私、まだ日本に行ったことないんだけど、いつかしたいことのリストの一番上にあるのが、日本に行くこと。・・・人種差別してるわけじゃないけど、そうね、やっぱり誰か日本人（日系アメリカ人）の誰かと結婚したいな。そして、いつか子供ができたら、私の両親や祖父母がしてくれたみたいに伝統を受け継がせたいわ。

## ジョン

僕の彼女（ネイディーン）<sup>16</sup> は、日本文化の知識を何も持ってないんだ。彼女の家族は、祖父母も含めてクリスチャンなんだ。だから、何て言いたいかっていうと、彼女は日本人（日系）だけど、もっと日本人（日系）だったらって思うよ。僕が思うに、日系仏教という宗教は、僕にとって重要なんだ。チャーチ（寺）に行ったり、家族のお墓に行ったり・・・。僕の祖父母の家に、仏壇があるんだけど、毎日先祖に食べ物をお供えしたりすることは、とても重要なことなんだ。でも、1つだけおかしなことは、彼女、日本食について良く知っているんだ。彼女が臭い匂いの納豆を食べるのは、大っ嫌いだよ・・・。

現在のコナという場所において、インタビューは行われた。参加者は、全員日系仏教徒である。彼らは、伝統と現代について語った。語りは、特に現代に焦点を置き、進行中の会話から成り立っている。上記にあげた語りから、宗教的アイデンティティーについて次のことが言える。ジョンが彼の彼女について語った内容は、世俗的な伝統主義<sup>17</sup>について。リンジーは、信心的な伝統主義<sup>18</sup>についての語りである。

世俗的な伝統主義の日系アメリカ人は、民族的、または、宗教的活動に多く身をゆだねていない。例えば、彼らは、墓石や位牌を見て、「これは単なる石、一枚の板」と思うかもしれない。しかし、そのようなケースばかりではない。彼らの中には、先祖が眠るお墓へ参りに行く。そのような事象は、宗教的慣習で、重要な伝統的価値を持っている。彼らは、墓の前で線香を焚き、目を閉じて合掌をする。そのような宗教的儀式をすることで、過去に愛した親族とコミュニケーションを取ることができると信じている。そのような儀式と同じく、個々の先祖を敬い、墓に美しい花を捧げる行為からも、伝統的価値を有していることが、明らかである。



ジョンの宗教的アイデンティティーは、信心的伝統主義に多く傾向している。仏教の宗教的慣習であるお墓参りやお盆、その他の宗教的行事について、キリスト教の慣例では禁止されていることが多い。仏教の宗教行事は、日系コミュニティにとって、宗教的習慣であり、ネットワークづくりの一環であったり、社交を行ったりする特別重要な儀式である。ネイディーンは、親密な日系コミュニティの外部であるホノルルに育った。さらに、彼女の何世代も前からキリスト教への改宗を行った。それらを踏まえると、彼女はアメリカの社会に文化変容した完全な状況であると考察できる。筆者の観察と簡単な会話から、ネイディーンがある程度、日本文化や伝統を受容していることが分かった。しかし、彼女の家族は、長い間日系コミュニティから離れてしまった。そのような状況で育った彼女は、日本人らしさを表現する能力を欠いてしまったのであろう。

## おわりに

同族結婚については、その立場にいる人がどちら側に属しているのか次第で、大きく異なる。コナコーヒーベルト地域に日系アメリカ人が5世代も亘って、アメリカに住み、日系コミュニティを存続させている。そのコミュニティでは、いまだなお同族婚への需要をみせている。デートや結婚のパターンについて、彼らが決断する過程の状況を議論した結果、家族やコミュニティの影響、日本文化の価値観が一般的な要素であると本調査でわかった。そして、世俗的伝統主義、又は、信心的伝統主義に関する宗教的アイデンティティーを保持する人々は、多数の事例から、民族内部での結婚に傾向する結果であった。日系人における結婚の意味や配偶者の役割とは、個人自体よりも、日本の伝統、文化的経験、家族によってある程度影響を受ける。さらに、コナコーヒー地域におけるコミュニティの日系人が配偶者の選択をする場合、コミュニティ内で選ぶことが彼らの文化において、長い間伝統になっている。

## 引用文献

- Crester, G. A., & Leon, J. J. (Eds.). (1982) *Intermarriage in the United States*. *Marriage and Family Review*. 5, (1).
- Freeman, L. (1955). Homogamy in interethnic mate selection. *Sociology & Social Research*, 32, 369-377
- Kikumura, A, and Kitano, H.H,L. (1973) "Interracial marriage: A picture of the Japanese Americans." *Journal of Social Issues* 29: 67-81.
- Kitano, H. H.L.; Yeung, W.T.; Chai, L. and Hatanaka, H. (1984). "Asian American interracial marriage." *Journal of Marriage and the Family* 46: 179-190.

- Labov, T. G., and Jacobs, J.A. (1986) "Intermarriage in Hawaii, 1950-1983." *Journal of Marriage and the Family* 48: 79-88.
- Labov, T. G., and Jacobs, J.A. (1998) "Intermarriage and mixed births in Hawaii: Preserving multiple ancestry." *Journal of Comparative Family Studies* 29(3).
- Lee, S. M., and Fernandez, M. (1998) "Trends in Asian American racial/ethnic intermarriage a comparison of 1980 and 1990 Census Data." *Sociological Perspectives* 41(2): 323-342.
- Medling, J. M., & McCarrey, M. (1981). Marital adjustment over segments of the family life cycle: The issue of spouses' value similarity. *Journal of Marriage and the Family*, 43, 195-203.
- Nakano, G. E. (1986) *Issei, Nisei, War Bride*. Philadelphia, PA: Temple University Press.
- Spickard, P. R., and Fong, R. (1995) "Pacific Islander Americans and multiethnicity: A vision of America's future?" *Social Forces* 73(4): 1365-1383.
- Sussman, M. B. (1982). "Intermarriage in the United States." *Marriage and Family Review*, 5. New York: The Haworth Press.
- Tajfel, H. (1978). *Differentiation between Social Group: Studies in the Social Psychology of Intergroup Relations*. London: Academic Press.
- Wilcoxon, S. A., & Hovestadt, A. J. (1983). Perceived health and similarity of family of origin experiences as predictors of dyadic adjustment for married couples. *Journal of Marital and Family Therapy*. 9, 431-434.

---

1 Crestser & Leon, (1982)

2 2つのデータは別々の調査方法を使った。1つは、フォーカスグループセッション。もう1つは、個人というマイクロレベルに焦点をあてた個人インタビューである。フォーカスグループセッションは2008年の夏に行われた。参加者は、ジェームズ、ジョン、サム、ジュリー、リンジーの5人である。

3 筆者と参加者らは、インタビューの間、バーベキューグリルを囲んでステーキを焼いたり、アルコールを飲んだりしていた。私の友人は、その隣で参加者である若い日系5世の女の子たちに日本スタイルのおにぎりの作り方を指導していた。

4 Kitano (1984) らは、1979年、ロサンゼルスに住む3世アジア人のインターマリッジについて調査した。その結果、彼らは、日系人以外に中国系は他に引けを取らず、異族婚の率が高かったことがわかった。そして、多くのアジアアメリカングループのアジア女性はアジア男性よりも、彼ら以外のグループの相手と結婚する傾向にある。その傾向は、彼らの研究と同じく、アメリカの国勢調査センサスで行われた結婚登録においても同様であった (Labov and Jacobs, 1986; Kitano et al., 1984; Kikumura and Kitano, 1973; Lee and Fernandez, 1998; Spickard and Fong, 1995)。さらに、アジア系アメリカ人の結婚では、高い率で、女性・男性共に彼ら以外の民族グループの相手と結婚している傾向にある。

5 ジェームズは、生粋の日本人だと彼自身認識している。彼は、ハワイ大学の生徒でコナのキーレクアで育った。彼が育った場所は、日系アメリカ人コミュニティの中心部にあたる。彼の父親は、影響力のある銀行員で、母親は、高校の教師をしている。父親は、本願寺浄土宗のメンバーで、母親は、セントラ

ルユニオンコナ（プロテスタント）へ積極的参加をしている。インタビューの間、彼の話し方はとても優しくかったが、筆者の調査についてとても積極的に参加してくれた。彼は、いつも皆に気を配り、ビールがきちんと皆に行き渡っているかどうか確かめていた。さらに、「祖母は、同族婚以外についてはとてもリベラルである。」と、彼は、述べた。

- 6 ジョンは、生粋の日本人だと自分自身認識している。シアトルにあるワシントン大学で学んでいる。彼は、コナコーヒーベルト地帯にあるコミュニティの少し外側の場所で育った。しかし、筆者は、彼をそのコミュニティに属すると判断した。判断理由として、そのコミュニティの人々が通うコナワエナ高校へ同じく通っていたことと、日系コミュニティの中心となる祖父母の家によく寝泊まりしていたことを考慮した。コナに住んでいる間、学校が終了した後や時間があるごとに、ジョンは地元の日系人の友人とよく過ごしていた。
- 7 Sussuman (1982) は、異民族間の結婚について調査した。その調査の結果、異民族間で結婚した夫婦は、特に「困難さと失敗の認識、さらにそのような異民族間の結婚について前向き、又は、成功させることを無視する傾向がある。」と、Sussuman は提示した。
- 8 ジェーンは、自分自身を生粋の日本人と認識している。しかし、母系から8分の1中国系の血が流れていると述べた。彼女は、無信心者だとはっきり宣言した。彼女は、サンフランシスコのコミュニティカレッジを卒業し、生まれ故郷のコナへ帰ってきた。現在、大きなホームセンター会社で働いている。彼女の育ったコナのケアホウという町は、コナコーヒーベルト地域のコミュニティである。彼女へのインタビュー中、彼女がコメントした、次の語りに敬意を示したい。「曾祖父をととても愛しています。そして、彼は、とても親切でした。」彼女の家族は、多くの民族問題に対して適度に自由主義である。と、彼女は、言及した。
- 9 サム自身は、純粋な日本人であると認識している。彼は、ハワイ大学の生徒で、高校生まで両親と一緒にコナコーヒーベルト地域の中心に住んでいた。その居住地は、特に日系人家族住居の密集が高い場所である。彼は、5エーカーのコーヒー農家を家族で経営しているところで育った。その為、彼はコーヒーの季節になると長い時間、家業を手伝わなければならなかった。彼の家族は、本願寺浄土真宗の積極的な活動をしている会員である。
- 10 筆者は、サムがこの話を語っている間、彼の顔の表情や、声のトーンを観察していた。その観察によって、彼は、将来この日系人コミュニティの中で結婚相手を探すであろう。と、十分説得できる状況と筆者は、判断した。
- 11 例えば、Freeman (1955) は、ハワイにおける個人の異民族間結婚について調査した。その調査で以下のことが分かった。①特に自身の属する民族グループに拒否された気持ち、②拒絶に反応して敵意を生じさせる、③通常のパターンとして他の民族グループと認識する。という3つのラベルに分かれると提示した。この記事は、50年代に書かれたものである。しかし、その時代から異民族同士の結婚について提示しており、未だ強く慣行していることが分かる。
- 12 スティーブは、半日本人と認識している。彼は、UCLA の学生である。スティーブの父親はヨーロッパ系アメリカ人の混血で、母親は、日系人である。スティーブによると、彼の民族的アイデンティティーは、彼の母親から影響を受けているようである。「僕の父親側からは、スペイン・ドイツ・オランダ・アメリカンインディアンの血を受け継いでいるんだ。でも、そのことについて自分でどう認識していいか分かん

ないんだ。あまり父親側（民族性）については興味がないんだ。だって、僕はコナに住んでいて、母親側のいとこや、おじや、おばと付き合いがあるからね。僕自身、半日本人ってことに自信をもっているんだ。」と彼は語っている。彼の母親は、日系コミュニティの中心的存在で、大福寺曹洞宗の積極的な活動をしている会員である。

- 13 ジュリーは、純粋な日本人であると認識している。彼女は、ハワイ大学の学生である。ジェームズと同じキーレクアで育った。彼女の父親は、歯医者をしており、母親はその歯科病院で受付をしている。両親ともに、大福寺曹洞宗の積極的な活動をしている会員である。
- 14 Madling & McCurey (1981) の研究では、結婚後の夫婦において、お互いの類似した価値や婚姻生活について調整が重要であると提示している。さらに、調査では、調査対象の夫婦が類似する価値をもっているほど、調整がうまくいくことも示されている。Wilcoxon and Hovestadt (1983) は、次のような報告をしている。夫婦それぞれの家族に類似が少ない場合は、お互いの関係に、低い満足度を示した。
- 15 リンジーは、純粋な日本人であると認識している。彼女は、南カリフォルニア大学の学生である。彼女は、コナコーヒーコミュニティの中心であるキーレクアで育った。彼女の家族は、本願寺浄土真宗の積極的な活動をしている会員である。彼女に会った際、気がつかされたことは、日本文化についての興味を持っていることであった。特に、日本食について興味を持っていた。その為、彼女の面会を終えた次の日に、彼女を招いて日本食のレッスンを行った。
- 16 ネイディーンは、ジョンの彼女である。彼女は、純粋な日本人であると認識している。現在、ショアラインコミュニティカレッジで学んでいる。彼女は、適度に裕福な家庭で育った。父親は、パールハーバーの海軍基地で、技術者として働いている。母親は、正看護婦である。彼らは、オアフ島にある、ホノルルのビバリーヒルズとして知られているカハラに居住している。彼女とは、以前シアトルに行った際何度か会って、話もしている。その会話の中で筆者は、日本人としての文化について彼女の知識は不十分であると感じた。それは、彼女が育った際に他の日系人らと交流をあまりしてこなかったからであろう。それに加え、彼女の背景にキリスト教の信心が埋め込まれ、様々な日本文化の慣習を習得するのは難しかったと思われる。
- 17 ここでの、世俗的な伝統主義は、次の社会的単位について描写した。日本の伝統的な習慣として重大な関わり合いのある、個人、家族、社会である。
- 18 信心的な伝統主義について、次のようなアプローチをした。先祖や歴史、又は、普遍性の信心が、伝統的日本の儀式における特徴を通して、どのように反映するか焦点を当てた。